

## ずいそう

## プロとアマの差

神崎 正



昔、サラリーマンの近代5種競技とは、ゴルフ、麻雀、囲碁、カラオケ、テニスと言った人がいる。このうちカラオケ、テニスは別として、GMG（この名前の会もある）競技は、年々高齢化しており、筆者も、雀荘や碁会所では、30年以上も前から今もって「若手」と呼ばれているほどで、いまや絶滅危惧種ではないかとさえ思える。それにしても「元気な老人」を中心に、わが国で多くのアマチュア愛好家に愛されている。その頂点にはプロが君臨し、われわれアマチュアにとってはまさに憧れの存在である。

**プロとは？** 人生にはいろいろな道がある。ゴルフのプロはプロゴルファーと呼ばれ、日々の研鑽にしのぎを削っている。囲碁・将棋のプロ棋士も、感性を研ぎ澄まし、道を究めていく点では良く似ている。彼らは、超難関を突破してきたにもかかわらず、脚光を浴びているのはほんの一握りにしか過ぎない。なることさえ難しいのに、プロで飯を食っていくのは至難の業なのである。

**飯が食えればプロか？** プロとは、勝負の世界に生き、それで飯を食っている人、である。ただ単に、職業の専門家や職人はプロとは呼ばない。なぜなら、職業であれば、たいがい食べていけるのであって、勝負に負けると路頭に迷うプロとは本質的に違う。医者、学者、技術屋、職人にはプロ意識は求められるが、単なる職業にしか過ぎない。プロには、甘えが許されない。

**プロとアマの差は？** すさまじい修業をつんでプロとなる。何のための修業か？ 右脳を鍛えるためと思う。左脳が、計算や情報を整理、処理する能力に関わっているのに対し、右脳は、空間的な認識、感性や直観に関わっているとされる。この右脳、左脳のバランスがプロとアマの大きな違いなのである。囲碁・将棋もゴルフも麻雀も、部分への集中力と全体のバランスを見る能力との両立が全てである。部分に気をとられ、全体を見失うことは致命的である。プロとアマの差、それはこのアマの決定的な‘あまさ’にある。

**右脳をどう鍛えるか？** 囲碁・将棋はイメージの世界である。言わば、数十手先までを何十通りも読む、パターン認識の世界でもある。これはまさに右脳の活躍である。

プロゴルファーになるには、トラック3台分のボールの練習が必要、といわれる。一日中同じ練習を繰り返すのは、体で右脳を鍛えるためなのであろうか。アメリカの有名なプロゴルファー、ジーンリトラーが、全くの素人に言ったそうである。「あなたの脳と私の脳を入れ替えたら、すぐにもシングルになれる」と。

繰り返し無意識のうちに続ける、それは算盤の暗算や公文式算数に似ていなくもない。アメリカの赤ん坊が1年で英語をしゃべれることとも関係がありそうである。左脳で固まっている筆者には実感はないが、理解は出来る。

**神様とプロの差は？** 私が最も尊敬する囲碁棋士の一人、藤沢就行は、棋聖5連覇の絶頂期に記者からこんな質問を受けた。「囲碁の神様が100知っているとする、就行先生はどのくらいでしょう？」これに対して藤沢就行は、「せいぜい3~4くらいでしょう」と答えたといわれている。奥深さを知っているが故の謙虚さか、あるいは実感なのかもしれない。もちろん、右脳に限界（欠陥？）を持った小生には、理解を超えた話ではある。

**神様がゴルフをしたら、スコアはいくつで回れるか？** もちろん18である。つまらないから2度とやらないであろう。マージャンをしたらどうか？ へぼが入ったら、信じられないハイが出たり、やたらチーボンで、意外と苦戦するかもしれない。が、結局はいつもトップであることは間違いなく、であれば、つまらなくて二度としたくなくなるであろう。裏返して言えば、なぜアマチュア凡人が、親の死に目に会えぬほど熱中するかへの答えでもあろう。

さあ、これからも道を極めるための長い旅は続く。

——かんざき ただし 香川大学工学部安全システム建設工学科教授——